

# 東京都足立区におけるべー・ダンベ

上 條 厚

## 1. はじめに

東京都足立区は、東京都の特別区の一つである。東京都は特別区（23あるので一般に二十三区という）・多摩地区・島嶼からなるが、特別区（二十三区）は、いわば東京都内の都市部である。足立区は北側を埼玉県に接し、東および南東は同じ東京都の葛飾区に連なり、南西は隅田川をもって区の境とする位置にある。現在では二十三区の一つになっているが、都心からは離れている。江戸時代この地は江戸ではなく、1872年（明治5年）に東京府の所管となった所である。現在は都市化が進んでおり、都市化した地の例に漏れず、人口の多数が外部からの流入者となっているが、古来からのこの地の居住者も今なお大きな部分を占めている。都市化したこの地に広く行われている言語は共通語であるが、生え抜きの高年齢層には方言の色彩が濃い場合があり、東日本の方言に特徴的であるべー・ダンベも、土地の人の会話では聞かれる。以下、べー・ダンベに関して見る。共通語が優勢であるこの地におけるその使用の状況を述べる。

## 2. 足立区のべー・ダンベの体系の概略

始めにこの地のべー・ダンベについて、語法の面から略述する。<sup>(1)(2)</sup>

べー・ダンベを用法の点から分類すると、べーは意志・勧誘・推量・確認を表す。ダンベは推量・確認を表す。（足立区での用法はこのように分類するのが適当と考える。）動詞の非過去肯定について例文を見る。

- (1) 意志 ミンナ カウカラ オレモ カウベ
- (2) 勧誘 コレガ イーカラ オメモ コレオ カウベ
- (3) 推量 アイツモ タブソ コレオ カウベ／カウダンベ
- (4) 確認 モチロン オメモ カウベ／カウダンベ

実際の会話は、意志ではカウベヤ、勧誘・推量ではカウベヤ・カウベヨのように、ヤ・ヨを付けることが多い。（春日1982では、埼玉県熊谷市のべーは勧誘において、聞き手が単数の場合「よ」、複数の場合「や」が接続するとしているが、足立区ではそのような違いはないようである。）

動詞への接続に関して見ると、べーは、五段動詞は終止形に付く。一段動詞は終止形および未然形に付く。未然形に付く言い方は年寄りが多く言うということである。五段動詞・一段動詞ともに、語尾のルはンになることが多い。<sup>(3)</sup>

- (5) キョーフ ハヤク ケールベ／ケーンベ（五段動詞の例）
- (6) ヤキューデモ ミルベ／ミンベ／ミベ（一段動詞の例）

サ変動詞・カ変動詞への接続は複雑である。サ変動詞は次のようになる。

(7) アトマワシニ シルベ－／スルベ－／シンベ－／スンベ－／シベ－／スベ－

この地のサ変動詞は、一段化した活用と共通語形とが併用されている。したがってスベ－以外の形については、ベ－が終止形・未然形に付いていると説明できる。スベ－は特殊な接続である。<sup>(4)</sup>カ変動詞は次のようになる。

(8) アシタ クルベ－／クンベ－／コンベ－／キンベ－／キベ－

この地でのカ変動詞には否定形にキネ－の形があり、コネ－と共存している。したがってクルベ－・クンベ－・キベ－については、終止形・未然形への接続となる。しかしコンベ－・キンベ－については特殊である。(この形が少数ながら行われているという事実の指摘に留める。)なお他の方言に見られるコベ－・クベ－の形<sup>(5)</sup>は、この地にはないようである。

次にダンベ－の動詞への接続について見ると、これは終止形に付く。なお共通語の「のだらう」に相当するンダンベ－の言い方もある。

(9) アイツウ ウチニ イルダンベ－／イルンダンベ－

動詞の非過去否定の場合の用法は次のようになる。非過去肯定と並行している。

(10) 意志 コンナ タカイノ オレワ カワネベ－

(11) 勧誘 オメモ コンナ モノ カワネベ－

(12) 推量 アイツウ ケチダカラ カワネベ－／カワナカンベ－／カワネダンベ－

(13) 確認 アイツウ アンナ モノ カワネベ－／カワナカンベ－／カワネダンベ－

このように推量・確認の場合のベ－には、ネベ－・ナカンベ－の二つの形がある。ネベ－はネーベ－ともなる。ナカンベ－は意志・勧誘には使われない。

動詞の過去(肯定・否定とも)の場合には、当然のことであるが意志・勧誘はなく、推量・確認の用法がある。

(14) アノ トキノ ダイキンワ カイチョーガ ダシタベ－／ダシタダンベ－

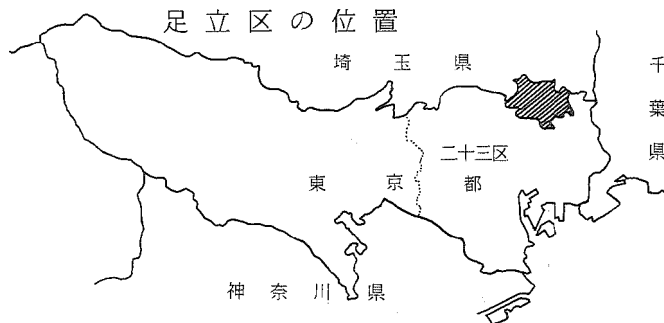
(15) ヤッコサンワ ソノ コトオ シラナカッターベ－／シラナカッターダンベ－

次に形容詞・形容動詞・名詞述語について見る。これらは動詞の過去の場合と同様、意志・勧誘はなく、推量・確認の用法がある。

形容詞の非過去肯定は次のようになる。

(16) ホッカイドーワ サムイベ－／サムカンベ－／サムイダンベ－

このように、ベ－にイベ－・カンベ－の両形がある。このことは動詞の非過去否定の推量・確認に、ネベ－・ナカンベ－の両形があることと並行している。後で見るように、形容詞・形容動詞等の非過去否定の場合でも同様である。



形容動詞と名詞述語は、ペー・ダンペーに関わることは全て同形である。非過去肯定は、次のようにペーとダンペーとが一つの形になる。

(17) アノヘンワ シズカダンペー

形容詞・形容動詞・名詞述語の非過去否定は次のようになる。

(18) アキハバラナラ トークネーペー／トークナカンペー／トークネダンペー

(19) アンマリ ニギヤカジャネーペー／ニギヤカジャナカンペー／ニギヤカジャネダンペー

このようにペーには、ネーペー・ナカンペーの二つの形がある。ネーペーは動詞の場合のようなネペーにはならない。

形容詞・形容動詞・名詞述語の過去については、動詞の場合と同様、言い切った形に接続する。例文は省略する。

共通語の「のだろう」に相当する言い方はンダンペーであるが（前述）、形容動詞・名詞述語の非過去肯定では、共通語の「なのだろう」に相当するナンダンペーの形となる。

(20) アノシトワ シャチョーナンダンペー

非過去否定ではネンダンペーの形となる。ネンダンペーともなる。

(21) アイツワ オレガ イクカラ イカネンダンペー

これら以外では、言い切った形にンダンペーが付いたものとなる。

(22) ソコハ ココヨリモ サムインダンペー

ここまでに見たことは、補助動詞・助動詞の場合も同様である。

(23) サー コノ シゴト ヤッチャウペー

(24) カギワ ウチノ ヤロッコニ シメサセルペー／シメサセンペー

(25) カシオ クイテペー／クイタカンペー／クイテダンペー

以上、概略を述べた。

### 3. 足立区内全域での使用状況調査の結果

#### 3.1 調査の方法と結果

次に足立区内全域で使用状況の調査を行った結果について述べる。足立区も他の地域と同様、共通語化が進んでいるが、その中でペー・ダンペーの使用がどのような状況であるか見るために調査を行った。調査した項目は次に挙げるとおりである。体系の概略について上に述べたことを基にして項目を作成した。

1. 動詞，非過去肯定，意志
2. 動詞，非過去肯定，勧誘
3. 動詞，非過去肯定，推量
4. 動詞，非過去肯定，推量「のだろう」相当
5. 動詞，非過去肯定，確認（相手のことを）
6. 動詞，非過去肯定，確認（第三者のことを）
7. 一段動詞，非過去肯定，勧誘
8. 動詞，非過去否定，意志

9. 動詞, 非過去否定, 勧誘
10. 動詞, 非過去否定, 推量
11. 動詞, 非過去否定, 推量「のだろう」相当
12. 動詞, 過去肯定, 推量
13. 動詞, 過去肯定, 推量「のだろう」相当
14. 補助動詞, 非過去肯定, 勧誘
15. 形容詞, 非過去肯定, 推量
16. 形容詞, 非過去肯定, 推量「のだろう」相当
17. 形容詞, 非過去否定, 推量
18. 形容詞, 非過去否定, 推量「のだろう」相当
19. 形容動詞, 非過去肯定, 推量
20. 形容動詞, 非過去肯定, 推量「のだろう」相当

この項目それぞれに一文ずつ配し、ペー・ダンペーの予想される語形を全て挙げて調査票とした。前出のペヤ・ベヨが用いられる可能性がある場合には、それらも併記した。調査時にはこの調査票を調査対象者に見せる、または調査者（わたしのみであったが）が読んで、その語形を使うかどうか聞くという方法をとった。また数項目調査した段階で、「昔言ったが、今はたまにしか言わない」「今は全然言わない」などのことをはっきり主張されたときには、調査を途中で打ち切った場合がある。

調査の対象は生え抜きのみとした。農業従事者を中心とし、自営業者も加えた。なお高齢により現在は無職という場合もある。また生まれた土地にそのまま住んでいることを原則とし、引っ越し等した場合には移動が数百メートル以内である人に限った。年齢については高齢者を主にし、40歳代も若干調べた。性別は男性を主とした。実際問題として、以上の条件を満たすのはほとんどが男性である。

調査は1989年10月から1990年9月にかけて、断続的に行った。以下に示す年齢・職業は1990年10月1日現在のものである。

調査の結果、ペーとダンペーの内、いずれか一方だけを言うという人はいなかった。ペー・ダンペーを使うという回答があった人の場合でも、調査項目に挙げた全てについて言うとは限らない。（これに関することを後で述べる。）

次に調査結果の集計に基づいて分類する。ここでは調査項目の内、予想語形が二つ以上あるものについては、その内一つでも「言う」と回答があった場合にはその項目を「言う」として集計する。調査の結果、調査項目のほとんどに「ふだん言う」と回答した人が2名あった。（P.162～P.163の地図の<②><43>。両者とも19項目に「言う」と回答。また調査票に用意した形容詞を別の形容詞に換えた場合、<②>は全項目が「言う」となる。）調査項目の多数に「土地の人と話す時には言う」と回答した人は9名あった。その人たち（時間の都合で調査未終了である1名——地図上の<36>を除く）は12項目以上に「言う」と回答している。次に「土地の人と話す時には言うことがある」の回答を若干の項目についてした人たちがいる。ただしその人たちには途中で調査を打ち切った場合があるので項目数の集計はできない。他には「昔言った」「昔少し言った」「昔から言わなかった」などの回答があった。

これらの場合にも調査を途中で終わらせたものがある。

以上をふまえて調査の結果を、①ふだん、もしくは土地の人と話す時には言う。②土地の人と話す時、たまには言うことがある。③昔言った。今は言わない。④昔、少しは言った。今は言わない。⑤昔から言わなかった。のように分類する。これを55歳以上の人の結果について、年齢別・職業別に集計すると表1のようになる。全部で53名、内2名が女性である。

表1

	計	年 齢			職 業	
		55歳～	60歳～	70歳～	農業	自営業
① ふだん、もしくは土地の人と話す時には言う。	11(2)	4(1)	6(1)	1	7(1)	4(1)
② 土地の人と話す時、たまには言うことがある。	9	3	4	2	8	1
③ 昔言った。今は言わない。	19	0	10	9	14	5
④ 昔、少しは言った。今は言わない。	5	1	2	2	4	1
⑤ 昔から言わなかった。	9	2	3	4	7	2

・ ( ) は女性で、内数。

・ 職業は、現在無職の場合、以前の職業

この表により、「言う」と答えた人は、必ずしも60歳代・70歳代の高齢者ばかりではないことが分かる。

### 3.2 結果の地図化

これを地図上に示したものが、P.162～P.163に掲げる地図である。女性は<①><②>である。この地図で空白の所が幾分ある。<23><25>と国道四号線(日光街道)の間に大きな空白があるが、この一帯は住居が密集していて農家が全然ない所であり、調査対象者が得られなかった。<45><50><49>と環状七号線に囲まれた部分も農家が少ない所である。

この地図によると、まず、①ふだん、もしくは土地の人と話す時には言う。②土地の人と話す時、たまには言うことがある。の人が区内にほぼ全域的にいることが分かる。これでペー・ダンペーの使用が、少数の人たちのみ、また一部の地域のみではないことが確認できる。

この地図に①の人たち、<36><37><38><43><44><45>が固まっている部分がある。このことは注目に値すると言えよう。偶然にそういう人たちのみを調査していたという可能性があることも否定できないが、注目しておいてよいであろう。

次に、回答の信憑性に疑問を感じる面があることに触れる。地図の<32>は、67歳、農業であるが、③昔言った。今は言わない。となっている。ところがその子供で同一家屋に居住の、49歳、農業の男性に対する調査(55歳未満なので、表1の集計および地図には出してない)では、②土地の人と話す時、たまには言うことがある。の回答となっている。40歳代が今も時々使っていて60歳代の方が今は使わない、ということは考えにくいことであり、疑問が残る。

次に⑤昔から言わなかった。の人について見る。昔から言わなかったという回答が、そのとおりであるか疑問に思ふ場合がある。<12><13><14><23><30><35><50>についてはその近くに、今言うないしは昔言ったという回答の人たちがおり、そういう中で⑤の回答の人たちだけが昔から使わなかったということは考えがたい。⑤の人も昔は使っていた









17. 形容詞, 非過去否定, 推量											
ネーペー	○	○	○	○	×	×	○	×	○	×	
ナカンペー	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	
ネダンペー	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	

○ 言う × 言わない

a. 一段動詞, 非過去肯定の接続

調査項目の7は一段動詞, 非過去肯定の勧誘である。この場合, 接続の形が三つあるが, 表2のような回答となっている。どの人も三つの形の内いずれか一つは使っているという結果であり, 人によって使わないものがある。ルガンになった形のメンバーを使わない人が幾分多い。

b. 否定の意志・勧誘

調査項目の8と9は, 否定の意志・勧誘を表すカワネペーなどの言い方である。否定の意志は共通語では「～まい」であるが, 否定の勧誘の方は共通語にぴったり相当するものがない。強いて言えば「～ないでおこう」である。表2に見るように8や9を言わないと回答している人がある。否定の意志・勧誘は言いにくいということであろうか。

c. 形容詞, 非過去肯定の場合

調査項目の15は, サマイペー・サムカンペー・サマイダンペーのように言うものである。表2から分かるように, イペーを使わない人は全部が60歳以上となっている。さて井上1984bは, 東日本のペイについて述べ, タカカンペ・タカカッペ・タカイペの間では前の二者が古い形と考えてよいとし, またイーベ(「良いだろう」の意)などの形は新しく発生した, という旨のことを述べている。飯豊1984は, 関東地方の方言について述べる中で, カイタペー・タケーペーのように, ペーが言い切りの形に付く形式が広がりつつあるとし, 「昭和20年ごろは福島県の中部地域までの言い方であったが, 昭和45年ごろには茨城県北部・栃木県北部まで用いられるようになり, 現在は埼玉県や茨城県南部でも少年層を中心に用いられるようになっている」と述べている。日野1984は, 神奈川県の方言について述べる中で, オッカネーペーのように形容詞の言い切りの形に直接ペーを添える言い方は, 若い層から広がり始めた, という旨のことを述べている。このように, 形容詞の終止形にペーを付けるのは新しい言い方と考えられる。

表2で, 終止形にペーの付く形であるイペーを使わない人が, 全部60歳以上であることは, これが新しい言い方であることを反映したものであろうか。これだけの資料で判断することはできないが, こういう調査結果であることを指摘しておく。

d. 否定の推量

調査項目の10・17は非過去否定の推量である。これらは形容詞の非過去肯定と並行しているものである。「c」で述べた項目15でイペーを言わない人たちについて, それに対応するネペー・ネーペーの使用を見ると, <43>の項目10の場合を除き, みな言わないとしており, イペーの場合とはほぼ同じ結果となっている。ナカンペーについて見ると, 言わないとしている人が大分おり, 項目15でカンペーを言わない人が1人だけであることと同様にはなっていない。

## 5. おわりに

以上、足立区のペー・ダンペーについて概観した。生え抜きの高年齢層にはペー・ダンペーを日常的に使っている人たちがいることを指摘し、その使用の面で注意されることを若干述べた。

足立区での使用状況についての調査は、40歳代の人たちに対しても少し行ったが、40～44歳の人たち（いずれも男性）から得られた答えは、年寄りと一緒にいる時には言うことがある（44歳、自営）、昔は言った（43歳、農業）、自分は言わないがよく聞く（41歳、自営）、ダメダンペーなど以外は聞くことがない（42歳、農業）、などであった。この地でペー・ダンペーが衰退しつつあることを示す答えとなっている。それでもこの年代はまだ、ペー・ダンペーになじみのある方であろう。

共通語化の前にペー・ダンペーが衰えていくことは時代の趨勢だと思われる。しかし生え抜きの中には、現在も使っている人たちがいるのである。

### 注

- (1) 共通語化が進んでいるため、語法一般に方言形と共通語形とが共存している。その点をふまえた上で以下に見る。
- (2) 体系的言語資料の提供にご協力いただいたのは、主として、足立区平野町に在住の日比谷三男氏である。氏の言語背景は次のとおり。足立区平野町1934年生、小学校6年生の時4ヶ月間埼玉県に疎開した以外は同地に居住。職業 1952年～1955年農業、1955年～1972年仲卸業、1972年～青果業。56歳であるが方言形の使用量も多く、内省もしっかりしている方である。なお氏はP.162～P.163に掲げる地図では<38>である。氏には、足立区の全域調査のための調査票を作成する時にもご指導をいただいた。
- (3) 井上1984aは、埼玉県の方言における同様の現象を述べている。
- (4) 大橋1976によると、スパーの形は北関東で広く行われている。
- (5) 例えば大島1975は、神奈川県でコペー、東京西部の多摩地区で主としてクペーであると述べている。また杉村1984は、群馬県は吾妻群を除く全県でクペー、吾妻群ではコペーであると述べている。
- (6) 江戸時代、日光道中の初宿に指定され、宿場町として栄えた地域である。
- (7) 未公表のものであるが、東京言語調査研究会が進めている「新・東京都言語地図」作成のために行った調査でも、同地区の高年齢層はペー・ダンペーを使わないという結果が出ている。

### 引用文献

- 飯豊毅一 1984「関東方言の概説」『講座方言学5 関東地方の方言』国書刊行会  
 井上史雄 1984a「埼玉県の方言」『講座方言学5 関東地方の方言』国書刊行会  
 井上史雄 1984b「現代東日本のペイの分布と変化」『東京外国語大学論集』34号  
 大島一郎 1975「関東方言」『新・日本語講座3 現代日本語の音声と方言』汐文社  
 大橋勝男 1976『関東地方域方言事象分布地図2 表現法篇』桜楓社  
 春日正二 1982「高崎線沿線都市の方言調査——大宮・熊谷・高崎の助動詞「ペー」「ダンペー」を中心にして——」『立正大学人文科学研究年報別冊』3号  
 杉村孝夫 1984「群馬県の方言」『講座方言学5 関東地方の方言』国書刊行会  
 日野資純 1984「神奈川県の方言」『講座方言学5 関東地方の方言』国書刊行会